1969.9.25 明治大学新聞

授業再開を前に

――キャンパスの表情

九月のキャンパスは人もまばら――。バリケードも立看も風雨にさらされ、紛争一〇〇日を象徴する。しかし十月の新学期を間もなく迎えるにあたり、毎々と学生の活動も活発化しつつある。そこで、これまでの経過を踏まえて、和泉・生田のキャンパスと寮の近況をルポしてみた。

〝右翼〟の横行も…和泉

生田…院生・助手共闘が活躍

和泉　社学同の内ゲバ（7・6）以降ジリ貧状態の続いた和泉キャンパスは、九月に入って質的にはもとより、量的にも全く形骸化したバリケードだった。当初和泉地区にいたSFL・中核のほとんどが本校に集まりノンセクトの史学地理闘委の一部と社学同系の政経闘争委など一握りの全共闘が活動していた。夜の泊り込みの人数は、多くて一二～三人少ない時は二、三人。各闘争委間の連絡も皆目なく、何が起っても対応すらできない程であった。この細々と泊り込む学生に対し、一連の右翼系学生などのいやがらせが続々と横行した。正門前で立看を破ったりバリケードの一部を壊したり、一号館に宿泊中の学生を殴ったり（9・18）そして十九日には深夜三時頃トラックで乗り込んだ右翼学生（日大生四人、国士館大生一人＝いずれも凶器準備集合罪で逮捕された）が正門付近の立看に灯油ビン三本と石などを投げ立看の一部が燃えた事件などが起った。

これに対し、和泉地区はこれまで地区全共闘全体としての一貫した運動方針や責任体制がなく、全くのバラバラで、単なるキャンプ地として実体がなかった。学生も続々と帰郷・バイトで閉店休業状態であった。

しかし、十五日以降学生も帰校し始め、右翼系学生横行の刺激もあって再び息を吹き返してきつつある。一号館では右翼系学生の攻撃に対置するため各闘争委室は四階に移り、四階へ通じる階段はすべてバリケードで固めた。また本校地区に移っていた文闘委などの学生が帰り、徐々に泊り込みの人数が増えている。今まで不備だった各闘争委の連絡を密にしており東大C、日大文理など他大学との連絡体制も整っている。

和泉地区のノンセクトで最も全共闘系学生の多い史学地理学科の各闘争委では「これまでクラスでの運動を母体に史学地理学科闘争委という形で運動を進めてきたが責任体制が明確になっておらず、実質的に史地の学生を組織化できなかった」として大衆運動を保証するべく組織として史学地理共闘会議を作っている。そのほか、地理・西洋史学科もクラス討論を開始しており、政経闘争委・サークル関係の各闘争委も十月を前に体制作りをいそいでいる。

一方、和泉構内に入る学生の姿も目立ち始め、毎日五〇〇人近くが登校している。その半分は合宿を終えた各サークル員でその総括作業に毎日登校している。それら学生の反応はさまざまだが「講義を受けて毎日規則正しい生活をしたい気もするが、これまでのような方法、内容ではサボるしかない」（文二）「元の大学のような生気のない生活を想像すると寒けがする」（法二）と概して全共闘に心情的に共鳴している。今後全共闘はこれら和泉地区学生の心情をいかに目的意識化させ組織化していくかが中心課題である。しかし、一部には「バリケード絶対反対」（商一）の声もあがっており一般学生がドット来る十月の動向が注目されよう。　＝K＝

生田　十六日、二十一日と「全朋討論会」を主催してきた、生田地区の院生共闘会議、助手共闘会議の登場は、今回の明大闘争を特色づけるものである。東大闘争の例を引くまでもなく、これら院生・助手共闘の動きは注目されている。

九月六日付で、全教官宛に配布された「農学部実験助手有志」名の「機動隊導入による授業再開に反対する」というパンフ（別掲）と、「われわれの態度表明」（9・13）は二、三の反応があっただけで（9・23現在）、「むしろその少なさに驚いている」と助手共闘はのべている。しかもこの反応とは他学部の教員がどういう状況なのか知りたいという程度のもので、「肝心の農学部教授会の姿はまだ現われていない。全くの無視、黙殺じゃないか」という言葉が自嘲を交えて、漏られた。そして、「こういう反応のなさ、つまり無関心さが、われわれを立ち上がらせた理由ともいえる」と話している。

「われわれの態度表明」の要旨は次の通り。

われわれは自己を次ぎのように規定する。①〈研究教育機関〉にいながら「研究とは」「教育とは」一「大学とは」「社会とは」一等々の根源的発想による意義・位置づけを欠落して日常を営為してきた。②日常的営為についても、自他共に厳しく律せず、無責任を互いに許容してきた。③それ故、自己の仕事は処分に請負的であり、また下請けさせたりしてきた。④であるがため、われわれの任務を学内・社会に充分還元させぬようには努めてこなかった。⑤したがって、研究教育者としては不充分であり、⑥結果的には自己中心的であり、非建設的な不平不満分子でしかなかった。以上のような〈実験助手〉の存在は今後不要であると判断した。

われわれの闘いは、われわれが過去に歪まされてきた状況を再度実現させてはならない闘いでもある。具体的に現状況を生みだしてきた根源は現資本主義体制と大学当局、教授会等であることは言を待たない。

われわれは、教授会の大学改革に対する不熱意な取り組み方、思考方法の硬直化、被害者意識の過剰（加害者意識の欠如）、現研究教育体制（学内外）に対する認識不足等々の、当事者能力を失なったことを厳敬・情落的体質と姿勢および教授会構成員の地位保全、権威主義、偽善性をいやというほど見せつけられてきた。

われわれはこのまま十月になり授業が再開されようとも、実験助手も学生等々の提起した問題に自己批判を含めて正しく答え、悔い改める決意をわれわれに約束し、原理的、身分的に平等なる者としての新たな緊張関係の場としての新しい大学を創造する保障がない限り、われわれは教授会の行なう教育研究の管理運営に責任はもてないし（非協力）、われわれの意と無関係なすべての大学決定、教授会決定はわれわれを拘束するものと認めない（不服従）ことを業務拒否を含むあらゆる行動をもって示す。

「われわれの行動に対する批判は遠慮なく受けたい。現在までの手応えのなさには、決して悲観はしていない」と助手共闘ではのべている。　＝Y＝